



阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター

資料室 ニュース



Vol.43
2010年12月
●発行●

特集 描かれた阪神・淡路大震災 — 震災15年「震災の絵」展 —

阪神・淡路大震災の発生から15年目を迎える2010年1月17日から1月30日までの間、兵庫県立美術館ギャラリー棟において「阪神・淡路大震災15年「震災の絵」展」が開催されました。

この展示にあたっては、2009年6月からNHK神戸放送局が体験者の経験や記憶に基づく絵を募集し、兵庫県内をはじめ大阪府・京都府在住の方々から234点の絵が寄せられました。それに加えて、震災を体験していない子どもたちが描いた絵など、合わせて約400点が展示されました。

会期終了後、110点余りの絵がセンターへ寄贈されました。ここでは、そのうちのいくつかの作品を、絵に寄せられた作者の言葉とともに紹介します。



「震災の絵」展の様子

主催：NHK神戸放送局、神戸新聞社、兵庫県、
兵庫県立美術館、人と防災未来センター
後援：神戸市、ひょうご安全の日推進県民会議

※「震災の絵」展の全出展作品は、NHKのホームページでご覧いただけます。 http://cgi2.nhk.or.jp/hisaito2/experience/exp_list.cgi?code=10

喪失と希望

「震災の絵」展に寄せられた絵で最も多かったのが、地震で一変した街や家を描いた絵です。計り知れない喪失感や絶望、悔しさ、悲しみを絵にぶつけた人もいます。同時に、ガレキと化した街のふとした情景に、わずかな希望を託した人たちもいます。



〈大井手町(西宮市)〉 阿部 洋子さん(西宮市/68歳)

1995年2月頃、西宮市大井手町。正面に西宮のシンボル甲山を望むこの交差点が私は好きです。

未経験の大震災に、父母と必死の日々をおくりました。街はめちゃくちゃで電柱はもつれ、街から直角や平行が無くなりました。救急車・消防車・トラック等が忙しく往き交いました。

この絵は震災の年の秋、自分のやり場のない思いを込めて描いたものです。本当は信号は点灯していなかったけど、地震の被害に「止まれ」という思いを込めて赤信号を灯しました。空は、普通ではない心情で晴れやかな青空を描けなかったけど、わずかな希望を込めて赤く描きました。

そしてスクーターに乗る私。「負けたらあかん」。

〈復興原点〉 高木 良行さん(神戸市長田区/69歳)

1月20日頃、長田区海運町3丁目。

何もかも奪われた焦土にはふとした静寂に包まれる時があった。道路は瓦礫に閉ざされ、車は通らず、電車は止まったままだった。放心した自分の感性がそうさせてしまったのだろうか。

異常なまでの取材ヘリの爆音にふと我にかえる。「大変な事が起こってしまった。」異様な光景に人々は涙する。「これからどうすればいいんだ、どう生きていけばいいんだ。」ただ呆然と佇む。まさに復興原点がここにある。



〈月の光に照らされる神戸〉 小橋 かおるさん(神戸市北区/45歳)

震災後、ポートアイランドから見た神戸の街は暗闇に閉ざされていた。また建物が倒壊し、地面は傾き、何が垂直に立っているものかもわからないほどだった。そんな神戸を照らしていた月の光。どんなことがあっても天を仰げば進むべき道は示されているとの思いを描きました。

死を銘記し死者を悼む

「震災の絵」では、死者をそのまま描いた絵はあまり多くありません。それは惨たらしい死(死者)を描くことへのためらいがあったからかもしれません。しかし、絵には死者が生きてきた証が刻み込まれ、その人を悼む想いが描かれています。

〈万感 一父の祈り〉 寺田 孝さん(神戸市須磨区/70歳)

1999年1月17日、長田区菅原通。
震災で娘を失いました。
毎年欠かさず娘が亡くなった地を訪れ供養をしています。



〈命・無残〉 畠田 隆夫さん(神戸市北区/67歳)

震災から2・3日後、長田区もしくは兵庫区。詳しい場所や時は忘れても、残念ながらあの時の光景は忘れられません。

大勢の通行人は、崩れた木材の下敷きになった被害者の足が目に入っているはずなのですが、警察官が「誰か手伝ってくれないか」と言っても誰も耳を貸さずにただ通り過ぎていくばかりでした。

私は現場横の車道で大渋滞のなかこの光景を目にしたのですが、救助の手助けもできず申し訳なかったと思っています。今思えばあの震災が想像を絶するほどの感覚の変化を人々に与えたのだと感じるのです。被害者のご冥福をお祈りするばかりです。

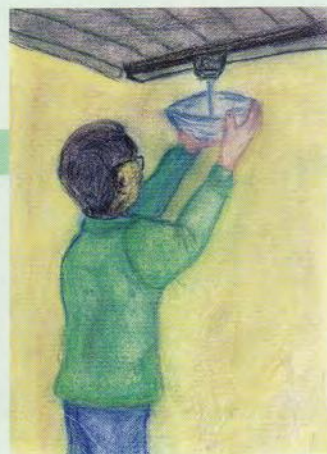
人と人とのつながり

「震災の絵」には、人とのつながりの再生を求め、日常の生活を取り戻そうと生きてきた人たちの「つながる人の力」を描いた絵も多数寄せられました。それらには、あらためて気づいた絆や新たなつながりなど、それぞれが実感した絆の存在が描かれています。



〈水集め〉 岩田 登美子さん

1995年1月、西宮市の自宅にて。
震災で全壊となった我が家。震災後、初めて雨が降った日に、夫が、壊れた樋に流れるわずかな雨水を生活用水にするためボールで受けていました。いつも何も家事を手伝わない夫がかいがかいしく働いていました。



〈感謝〉 貴島 裕さん(神戸市東灘区/71歳)

1月17日夜、東灘区の自宅にて。あの日の夜、知人が届けてくれた握り飯をろうそくの灯の下で食べたことは忘れられません。ありがたい厚意に感謝しつつも、さめやらぬ恐怖と痛ましい被害に、口にした握り飯はのどを通りませんでした。

資料室で所蔵する画集

題名	著者	発行	発行年
詩画集 悼ましい構図	三浦照子	美術書院	1999
水彩画で描くふるさとと神戸 1965年~2000年	三原康男	三原康男	2001
吉岡充 水彩画集	吉岡充	(株)エピック	2005
あの日あのとき 26歳になったあなたへ	明親小学校5年1組	山口恵子	2001
神戸・長田スケッチ 路地裏に綴るこえ	佐野由美	(株)六甲出版	1998
阪神・淡路大震災 スケッチ集	竹中信清	(株)ジュンク堂書店	1995
鎮魂と再生のために 阪神・淡路大震災をふりかえって	長尾和と25人の詩人たち	風来舎	1996

1938(昭和13)年・阪神大水害の記録 1

中條順子さん(宝塚市)より、阪神大水害(1938年7月3日～5日)関連の資料が寄贈されました。当時の新聞記事や、中條さんの伯母が水害当時の家族の様子を書き記した日記(写真右)、軍隊に入隊していた中條さんの父に家族の安否を知らせる手紙(写真下)などです。また、中條さん自ら、読みやすいようにと、崩し字で書かれた日記や手紙を書き起こし、ワープロ打ちした資料を添えてくださいました。

水害当時、小学生だった中條さんは学校にいて無事でしたが、曾祖母、妹、弟は神戸市の自宅で亡くなりました。伯母が中條さんの父に宛てた速達郵便の冒頭には次のように書かれています。

「悲しいしらせをせねばなりません。どうぞ落ついて読んでください。今五日午前十一時頃、王子町の家は山つなみにおそはれました。全く一瞬時の出来事とて声をあげるまもなく、すべては押し流されました。」

文中の「山つなみ(津波)」とは、土石流のことです。「全く一瞬時の出来事」で、「すべては押し流されました」とあることから、この時の土石流がどれほどすさまじいスピードと破壊力だったかをうかがい知ることができます。

また、日記には、家族の容態や治療の状況について書かれているとともに、「警察犬かゝす(嗅がす)」(7月14日)、「人夫二人、学生一五、六人」(7月15日)といった記述もあり、たくさんの人々が中條さん家族の救出を手助けした様子もわかります。

中條さんに続いて、お知り合いの原田睦子さん(西宮市)も当時の資料を寄贈してくださいました。地域ごとの被災度別地図が付いた「神戸市水害誌附図」という写真・スケッチ集です。生々しい被害状況の写真に加え、水害後に建てられた急設住宅の写真なども掲載されており、当時の人々の生活も垣間見えます。

お二人からいただいた資料を合わせて読むと、被災者個人の心情や生活と、より鳥瞰的な被災地全体の様子の両方を知ることができます。



水害当時の日記

資料番号：0000461-001009



家族の安否を知らせる手紙

資料番号：0000461-001003、001004

1938(昭和13)年・阪神大水害の記録 2

森下博子さん(姫路市)より、阪神大水害の写真が寄贈されました。撮影をしたのは、森下さんの祖父だそうです。森下さんが、祖父が故郷上郡に建てた蔵を整理した際にみつけたとのこと。

森下さん本人も5歳の夏に、当時祖父が住んでいた須磨に遊びに行き、神戸の高台から水害の悲惨さを目撃し、子どもの頃の記憶ながら今だに忘れることができないそうです。写真の大きさは2種類あり、11cm×8cmのものが43枚、6cm×6cmのものが28枚です。11cm×8cmのものは、山側地域の土砂崩れによる被害が撮影されたものです。山腹が崩壊して生じた土石が水と一体となって流下する、山津波の恐ろしさがわかります。6cm×6cmのものは三宮周辺を撮影しており、明治に付け替え工事が行われた旧生田川筋(現フラワーロード)周辺に水が流れ、川に戻ってしまったような状態がわかります。こちらは高いアングルから撮ったものもあり、報道写真のような画面構成です。どれも阪神大水害の被害状況のわかる貴重な資料です。



水に浸かった三宮公設市場



山津波によって運ばれた土石



水害の後始末をする人々と、
大量の洗濯物



山津波の流れた道

県外避難者の支援活動 —「街づくり支援協会」寄贈資料—

2009年2月および2010年6月、震災後から県外避難者の支援活動を行ってきた「街づくり支援協会」(大阪市西区)よりセンター資料室へ、段ボール箱13箱に及ぶ資料が寄贈されました。

●「市外・県外避難者ネットワーク りんりん」の設立

「街づくり支援協会」は、まちづくりを支援する専門家の団体として1992年に設立され、活動を行っていました。阪神・淡路大震災発生からしばらく経った1995年6月、大阪市へ転居してきた被災者からの一本の電話をきっかけに、県外避難者の置かれている深刻な現状を知り、その支援活動を始めます。

同協会は会報「りんりん」を発行し、被災者の声や被災地の情報を届け、各地でネットワークを広げていきました。1996年9月には17都道府県30ヵ所で被災者団体「市外・県外避難者ネットワークりんりん」と支援団体「市外・県外避難者全国ボラネット」が結成されました。

● 県外避難者からの声と支援活動

寄贈資料の中には、県外避難者から街づくり支援協会に寄せられた1000通を超える手紙があります。それらには、見知らぬ土地で暮らす不安やつらさなど被災者の生の声が綴られています。同協会はこれらの声に基づいて、県外避難者への情報提供や仲間作り活動、民間賃貸住宅の斡旋・引越し手伝いなど様々な活動を展開しました。また、マスコミや行政への働きかけなどの活動を進めました。

街づくり支援協会の活動は、「県外避難者」という存在を社会的に表明し、県外避難者同士のネットワークやセルフヘルプ・グループの形成を支援し、支援団体や社会とつなぐ役割を果たしました。



協会へ寄せられた数々の手紙

資料を寄贈された街づくり支援協会の
事務局長・中西光子さんは
こう語ります。

「阪神・淡路大震災でクローズアップされた県外避難者の問題は、今後の都市災害でも必ず起こるもの。大震災を教訓として今後に役立たせるために資料を活用・研究してもらいたい。」



文献紹介

現在の県外避難(被災)者を分析した文献として、田並尚恵「阪神・淡路大震災の県外被災者の今ー震災から15年」(関西学院大学災害復興制度研究所「災害復興研究」2、2010年)があります。

資料の貸し出しを行いました

(展示についてはすでに終了しています)

伊丹市立博物館へ

伊丹市立博物館の秋季企画展「阪神・淡路大震災15年～伊丹からの発信～」において、震災の痕跡を刻んだ壊れた時計や溶けた硬貨などのほか、被災地で使われていた生活必需品や救援物資など、当センターの震災資料が展示されました。



埼玉県行田市郷土博物館へ

埼玉県の行田市郷土博物館にて開催された、第24回企画展「天変地異・災害の日本史」では、非常食の缶詰や乾パン(写真)、震災当時を描いた絵画、壁新聞など、当センターの震災資料が展示されました。



貸出した資料(一部)

資料室企画展のご案内

戦後神戸の歩みと阪神・淡路大震災

日程：2011年1月12日(水)～2月13日(日)
場所：人と防災未来センター西館5階
資料室
開室時間：9:30～17:30
休室日：1/24、1/31、2/7

阪神・淡路大震災では、戦後50年の間、築かれてきた神戸の何が破壊され、また、そこからの15年間で何が生まれたのでしょうか。

神戸における、生活・地場産業・文化に注目しつつ、65年という長いスパンの中で、阪神・淡路大震災を振り返ります。

☎連絡先／078-262-5058
(人と防災未来センター資料室)

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30～17:30(展示スペースとは時間が異なりますので、ご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日～1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます